《わたしの指導案》特別支援(自閉症･情緒障害)学級 自立活動学習指導案

一人一人のウェルビーイングが、他者、そしてまちのウェルビーイングへと

兵庫県たつの市立龍野小学校　石堂 裕

１　学習の意図 ―共生社会の実現する教育活動をどのように仕組むか―

多様性、公平・公正、包摂性（DE&I）のある共生社会とは、「すべての人が個性・特徴を認め合い、ともに生活する社会」だと捉えている。その実現に向けた学習の意図は、次のとおりである。

Ⅰ　学級集団を社会に当てはめると、社会の中のマイノリティは、本校だと外国につながる子どもや特別支援学級に在籍する子どもになる。通常学級に在籍し通級指導を受ける子どもも当てはまる可能性がある。その子たちのウェルビーイングが向上する学習を仕組みたい。

Ⅱ　子ども一人一人の自分自身のウェルビーイングを、他者のウェルビーイング、そして身近な社会（学校やまち）のウェルビーイングへと深化させたい。

Ⅲ　アンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）は、過去の経験や周囲の影響によって形成されることから、「みんな友だち」を意識できる学習にしたい。

２　事例 ―特別支援学級の子どもから交流学級の子どもたちへの働きかけ―

特別支援学級での自立活動でモルックを経験した３年生のＡ児とＣ児が議題箱に「みんなでモルック大会をしたい」と入れたことがきっかけで、３年生のみんなでモルック大会をすることになった。写真１は、Ａ児とＣ児が最初の説明をしているところである。いつもの２人なら大勢のひとりとして参加しているが、この日は学級遊びの進行を担っていた。

写真１　進行するＡ児とＣ児

ルール説明とチーム分けが終わり、写真２のゲームが始まるとＣ児はチームの中心で活動し、Ａ児もいつもより、友だちの輪にいた。何より交流学級の友だちが「Ａちゃん、楽しいわ。」といった言葉がけが、Ａ児の不安を取り除き、友だちとの心の距離を縮めていたと判断する。

写真２　３年生モルック大会

モルック大会が終わった後に記述したＡ児のふり返り（図１）からは、「みんな」への思いが伝わってくる。みんなが楽しんで遊ぶ様子がＡ児自身の喜びにつながっている。この日の昼休みは、「みんなのひとり」が計画した学級遊びだった。いつもなら参加したがらないＡ児が、特別支援学級担任に「学級遊びに行ってくる。」と話したそうである。Ａ児にとってモルック大会をした経験が、ウェルビーイングにつながっていると判断できる。

11番
みんながたのしくしてげんきに遊べてたのしかったです。また、モルックをげんきにみんなで遊びたいです。

図１　Ａ児のふり返り記述

4年生のB児も3年生同様、議題箱に入れ、モルック大会が始まった。写真3に示すように、B児は交流学級の友だちを特別支援学級に招待して実施した。担任がB児の思いを聞くことで場所を決定したようである。子ども一人一人の思いや願いは異なって当然である。そこに寄り添うことで、子ども一人一人のウェルビーイングが向上するのである。

写真３　４年生モルック大会

３　まちのウェルビーイングにつながるきっかけに

図2は、3年生の交流学級の子どものふり返り記述である。20番や21番の記述から、モルックのもつ魅力に気付いていることが分かる。遊びを通じて夢中になり、それが楽しさやおもしろさにつながったのだと判断する。

20番私は「モルック」をしてみて頭を使ったて、計算をしたり、運動するスポーツだなと思いました。 私は「モルック」したのが今日で二回目です。　理由は、ボーイスカウトで一回したからです。けれども友だちとはやったことがなかったけど友達とできて楽しかったです。	21番 私は、モルックは知らなくてルールだけ聞いたら「どうせまた喧嘩になるだろうな～」と思っていたけど、予想以上に楽しくて、夢中になってしまいました。モルックのルールの「丁度５０点にならなきゃ25点になってしまうルールが面白いと思いました。また、家族や、お友達とモルック大会をしてみたいです！！	22番 最初はどんなのかわからなくて緊張したけど後からどんなのかわかってきて面白かったです。またみんなでモルック大会をしたいです。

図２　３年生交流学級の子どもたちのふり返り記述

また、21番と22番の記述からは、「友だちや家族とやりたい」という思いが理解できる。「他者とモルック大会をやりたい」という思いをもっているのは、この2名だけではないことから、新たに交流学級の担任の働きかけが鍵をにぎる。例えば、社会科の学習でお世話になっている地域のお年寄りを招待したモルック大会はどうであろう。室内モルックの体験から、モルックが手軽な遊びで、仮に椅子にすわっても可能であると考える子どももいるにちがいない。実現すれば子どもたちも参加したお年寄りも楽しい気持ちになれるはずである。

最後に、子ども一人一人のウェルビーイングの向上が他者のウェルビーイングに働きかけ、そしてまちのウェルビーイングにつながることを目指したい。まちを「子どもたちの輝ける場所」にするために。